レプリカ
♂♀

ミス・キャット
ミッション　ジャパン

K・ボーイ

２００８年６月。
「亜希子は夏休み、何をするの？」
大学のキャンパス内を歩きながら、シルビアが尋ねた。シルビアは２２歳のアイルランド人留学生で、日本に来て一年になる。日本語は流暢だった。
亜希子とシルビアは、大学で同じ学部だった。講義を受けるたび顔を会わせるうちに親しくなり、今では仲のいい友人である。

「今のところ予定はないけど・・・・・・」
「それだったらバイトしない？　」
「バイト！？」
「今、私が働いているカフェの仕事だけど。夏休みでバイトスタッフが休むから、人手が欲しいとマスターから頼まれたの」
「カフェね・・・・・・」
亜希子は迷うように言った。

「亜希子なら、大丈夫。私も一緒だから、やってみない？　」
「そうね・・・・・・わかった。でも、無理だと思ったら断ってもいいかしらん？」
「ええ、もちろん。それじゃ、明日私も付き添うから、マスターと面接いいかな？」

「うん、わかった」と、亜希子が返事をすると、肩に掛けてあるトートバッグから携帯電話が鳴った。
「メールだわ」
亜希子がバッグから、折りたたみ携帯を取り出して見る。
「えっ！」
亜希子は目を皿のようにする。
「どうしたの？　」
シルビアが気に掛ける。
「いや、別に」
亜希子は、すぐに携帯電話をバッグにしまいこんで、「じゃ、明日」
亜希子は慌てて、その場を去った。

亜希子が自宅マンションに着くと、真っ先に郵便受けの中を覗いた。すると、一枚の封筒があった。『富山亜希子様』と書いてあって、差出し人は書いていない。
亜希子は、封筒を手にして急ぐように自宅へ向かう。

「おかえりなさい」
亜希子が玄関に入ると、キッチンで叔母の政子が声を掛けた。

「ただいま」
亜希子は、そっけなく言って自分の部屋に入ると、机の椅子に腰かけて封筒を開ける。
写真が三枚入っていた。それを見た瞬間、亜希子は青ざめた表情になった。
少女だった頃に、ミッキーマウスと一緒の記念写真。水着姿でビーチにいる姿。つい最近のようで、パーティー会場の中のドレス姿。どれも自分が写っている。だが、亜希子自身には、身に覚えのない写真だった。どの写真も撮影された記憶がないものだった

亜希子は、もう一人自分に似た人物がいる。そのことを確かめるため、携帯電話で返信メールを送った。

ジェニーは、エディの所に来て、５年の月日が過ぎていた。
年齢は２０歳、大学に通いながら、密かにスパイになるための訓練を受けていた。
ジェニーは、ロンドン郊外にある施設にいた。
射撃室の中。ジェニーは、両耳をヘットフォンで塞いでサングラスをして、両手で拳銃を持って的を狙う。連続して銃声が響く。打ち終わると、教官が双眼鏡で的を見る。ほとんどが真ん中に命中していた。

「今日はここまでだ」
教官が、ジェニーから拳銃を受け取る。
「ありがとうございました」
ジェニーは教官に敬礼する。

「腕をあげたな」
ジェニーが射撃室を出ると、エディが声を掛けた。
「彼女は覚えがいい」
教官も感心したように言う。
「サラが待っている。すぐに帰ろう」
この後、ジェニーは、日本語のレッスンを受けることになっている。
エディが急ぐように言った。
「着替えてきます」
ジェニーは、訓練用の戦闘服から私服に着替えようと、更衣室に向かおうとする。

「お疲れ様」
年配の女性が現れた。
「部長」
がっちりした大男の教官が、直立不動で敬礼する。その姿を見たジェニーも、まねるように敬礼する。

「ご苦労様。あなたがミス・キャットね」
ジェニーは訓練を受ける時、そのコードネームで呼ばれていた。
「はい」
部長とジェニーは初対面だった。
「体調は、いいかしらん？　」
部長は、唐突に尋ねる。
「はい、大丈夫です」
「部長、どうかされましたか？」
エディは、急に現れた部長が、何か用件があることは察しがついていた。

「エディ、話があるの。私のオフイスに来てちょうだい」
「わかりました。ジェニー、先に車の中で待っていてくれ」
「はい」
ジェニーの返事を聞いて、部長とエディは廊下に出た。

「彼女、ずいぶん成長したようね」
部長は、エディと廊下を歩きながら、ジェニーを見ての感想を言う。
「訓練を始めて５年です。有能なエージェントになると思います」
エディは自信満々に言った。
二人はエレベーターの前に立つ。エディが番号のボタンを押す。
「そろそろ取り掛かってもらいたいの。但し、彼女はテスト生として参加させて欲しいけど」
部長は意味ありげな言い方をする。
「日本ですか？」
エディもわかっているように尋ねた。
「ええ」
部長が頷くと、エレベーターの扉が開いた。
二人はエレベーターの中に入る。
「くわしい資料を渡すわ」
「わかりました」
エレベーターは上に行く。

「少し急いでくれ」
エディが、ロールスロイスの後部座席から運転手に言った。
「かしこまりました」
運転手がアクセルを踏み込む。
ジェニーは、エディの横に座っていた。車窓から農園が拡がっていた。

「大学のほうは、どうだ？　」
エディが気になるように尋ねた。
「今は民法の勉強中です。夏休みから夏期講習に出ようと思っています」
ジェニーは弁護士を目指して、大学は法学部に通っていた。
「ジェニー・・・・・・悪いが夏期講習は行けない」
「えっ！？」
ジェニーはエディの顔を見る。
エディは大きな封筒から、１枚の写真を取り出した。

「夏休みになったら、彼女に会いに行ってほしい」
「これは？」
ジェニーは目を丸めて写真を見た。自分そっくりな女性が浴衣姿で写っている。
「君の母親である、トヤマ・サチコが産んだ子供だ。間接的だが、君のお姉さんになる人物だ」
エディの説明で、ジェニーは再び写真を見て、「今、彼女はどこにいるんですか？　」
「横浜にいる」
「横浜・・・・・・」
「テストとしてではあるが、君はミス・キャットとして日本に行ってほしい」
「それは・・・・・・」
「本格的なミッション開始だ」
エディは、引き締まった表情で言った。

次の日の午後。
「発音が良くなったみたいね」
サラが流暢な日本語で誉める。
「ありがとうございます」
ジェニーも日本語で返す。
サラは、ジェニーに日本語を教えている。彼女は三十後半の女性で、父親がイギリス人、母親が日本人のハーフだった。
長いブロンズの髪と、鼻筋の通った小顔が印象的だった。

「聞いたわよ。日本に行くんでしょう」
サラが興味深く言った。
「ええ、夏休みになったら」
「どれくらい滞在するの？」
「それは未定ですね」
「せっかく行くんだから、大阪や京都にも行くといいわ」
サラは、以前に日本を訪ねた時に、旅行した場所を勧める。

「ところで、どなたが日本まで付き添うの？　」
「付き添い？」
サラの尋ねたことに、ジェニーが首を傾げる。
「まさか、あなた一人だけが、日本に行くわけじゃないでしょう？　」
「そうね・・・・・・」
ジェニーは、考えてもいないことだった。
「トニーさんは、エディさんのお世話があるから・・・・・・」
ジェニーは検討がつかない。
「わかったわ」
サラがニコリと笑った。
「ちょっと休憩しましょう」
サラは思いついたように言って、慌ててジェニーの元を離れた。

トニーは、エディから書斎へ呼び出された。
「トニー、君にジェニーと一緒に日本へ行って欲しい」
エディは真顔だった。
「それは、私にエージェントの仕事をしろということですか？　」
「そういうことだ・・・・・・ジェニーのことを頼みたい」
エディは机から立ち上がり、トニーにすまなそうに言った。
「わかりました。ジェニー様のお手伝いをさせていただきます」
トニーは気を引きしめて言う。

「それで、これを見てくれ」
エディは、机の引き出しから写真を取って差し出す。
「この日本の男性は、誰ですか？　」
トニーが写真を手にする。
「代議士の徳島忠信という男だ」
男は、白シャツにネクタイをしている。見た目は四十を過ぎたぐらいだった。
「政治家・・・・・・それで、なぜ私に？　」
「ジェニーの父親かもしれない」と、エディは素っ気なく言って机の椅子に座る。
「・・・・・・」
トニーは、顔色を変えず写真を見直す。
「なぜ、これを私に？　」
「ジェニーに教えるか迷っている・・・・・・」
エディは本音を言った。
「君だったら、どうする？　せっかく日本に行くんだ。父親であるかもしれない人間に、会わせるチャンスかもしれない」
「今回は父親に会うのが目的ではありません。そのことは言わず、ミッションを優先します」
トニーは即答した。

「そうだな。さすが元イギリス情報員だけあるな」
エディは笑みを見せて感心する。その態度から、トニーはエディから試されたと思った。エディ自身もミッションを優先する。同じ考え方をするのかを試した。
トニーは写真を机の上に置いた。その時、写真の男の顔を、はっきりと覚えた。

「私からも、お尋ねしたいことがあります」
エディは、写真を机の中にしまい込んだ後、「何だ？　」
「ジェニー様には、殺しのライセンスを与える予定でしょうか？　」
「・・・・・・」
トニーの問い掛けに、「今回は与えない」

エディは、きっぱり言い切った。
「今回の日本では、危険が伴うようなことはないだろう」
「ＣＩＡ捜査官も動き始めている噂があります」
「君にはエージェントしての資格がある。もしも、ジェニーに何か危険なことがあったら、君が守ってやってほしい」
エディの言葉には、強い思いと願いがこもっていた。
「わかりました。全力でジェニー様をお守りします」
トニーは誓うように言った。

「それから、私が日本に行く間、どなたが旦那様のお世話をなさるんでしょうか？　」
トニーは、もうひとつ気がかりなことを尋ねた。
「心配はいらん。安心してくれ」
エディは笑みを見せて答えた。

その日の夜。
「二人に話したいことがある」
ダイニングテーブルで夕食を終えたエディは、トニーとジェニーに声を掛けた。
ジェニーは、テーブルでパンを口にしていた。
トニーは、テーブルの上の食器を片付けている手が止まる。

「どういったご用件でしょうか？　」
トニーは、突然のことで何事かと、少し神妙な面持ちで尋ねた。
「急な話になったが、あさってから日本に行ってほしい」
「日本に行くのは、来週のご予定では？」
トニーが、急な変更なため、首を傾げて聞き直す。
「日本での世話人が、早く来てほしいと言ってきた。それで、あさってから行ってほしい」
「私が日本に行くと、旦那様のお世話を誰がなさるんでしょうか？　」
トニーは心配そうに尋ねた。
「私がいるから大丈夫よ」
後ろの方から声がした。

「えっ！」
トニーは振り返った瞬間、目を見開いた。
「・・・・・・」
ジェニーは、呆気にとられて無言になった。
二人の前に、紺のロングスカートに、白いエプロンとキャップ帽で立つ、メイド姿のサラがいた。
「お二人が日本に行っている間、エディ様のお世話は、私がいたします」
サラは笑顔で言う。
「旦那様、本当に日本に行っても大丈夫でしょうか？　」
トニーは念を押して尋ねた。
「大丈夫だ」
エディは照れ隠しているように、無表情で答えているようだったが、サラが世話をしてくれることが満足そうに見えた。

サラがエディの書斎に、グラスに入ったウイスキーを持ってきた。
「どうぞ、旦那様」
エディが座っている机の上にグラスは置かれた。
「ありがとう」
エディはグラスに口をつけると、メイド姿のサラに目をやる。
サラは笑みを見せると、妙に色気を感じた。
「その服装は着なくてもいい・・・・・・」
エディは、サラから目をそらして言う。
「えっ！　気に入りませんか？　」
サラが不安そうに聞いた。
「そうじゃない。すごく似合っているが・・・・・・普段のカジュアルな服装のほうが、私は好きだ」
エディは困った表情をしながらも、素直な気持ちを言った。
「そうですか、わかりました」
サラは、エディの言葉が聞いて嬉しそうに返事をした。
「それでは帰ります」
「ああ」
サラが書斎を出てゆく、エディは顔がほころんでいた。
急に携帯電話が鳴って、電話の相手を見た瞬間、引き締まった顔に戻った。
「あさってから日本へ発ちます」
電話の相手は部長だった。
「そう、しっかりやってよ」
「わかりました」
「ところで、ジェニーには殺しのライセンスを渡すつもりなの？」
「今回のミッションでは、渡すつもりはありません」
エディはきっぱりと言った。
「いっか、きっと渡してちょうだい。ライセンスを使うべき時は使う。あなたもわかっているでしょう。キャンディの件があるから・・・・・・」
部長はせかす言い方をする。
「わかっています」
エディは語気を強めた。
部長はエディの反応を感じて、「ごめんなさい。つい、彼女のことを出して」
エディも感情的になった自分に気付いて、「いや、いいんです。ジェニーは、絶対彼女のようなことにはさせません」
「そう・・・・・・それじゃ頼んだわよ」
部長は電話を切った。
エディは、携帯電話を机の上に置いた。その後、引き出しから拳銃を取り出して、何かを考え込

んだ。

出発の日。
玄関外にタクシーが横づけされていた。
トニーが、二つのキャリーバッグをトランクの中へ入れた。
スーツ姿のジェニーが、タクシーに乗り込もうとする。
「ニャン」
飼い猫のハリスが現れた。
ハリスは子猫だった頃、ジェニーに連れられてエディの所に来た。それ以来、ずっとジェニーに飼われている。
「しばらくお留守番しているのよ」
ジェニーがハリスを抱え上げて、頭をさすりながら言う。
「ニャー」
ハリスは目を細めながら答えた。
エディとサラが見送りに来た。
「気をつけて行ってくるんだ」
エディは笑みをみせる。だが、その表情の裏には、ミッションのこと気にかけている。
「わかりました」
ジェニーは、心の中でミッションの成功を誓った。
「旦那様のこと、よろしくお願いします」
トニーがサラに礼をする。結局、エディも了承したのか、サラはメイド姿だった。
「任せておいて」
サラは、嬉しそうに笑顔で答えた。
ジェニーとトニーは、タクシーの後部座席に座った。
タクシーが動き出した。
エディとサラがタクシーを見送る。その横で、猫のハリスもいた。
「サラさん、エディさんのお世話できるのかしらん」
ジェニーは不安まじりに言った。
「大丈夫です。心配することはないでしょう。旦那様は、サラさんのことを気にいっているようです」
「えっ！」
トニーの口ぶりは、二人が男女の関係であるようなニュアンスを感じさせる。
「ひょっとして、二人は・・・・・・」
ジェニーは振り返り、後部座席の窓から二人を見る。
「それ以上詮索しないほうが、いいでしょう。二人とも大人ですから」
トニーは優しい口調で忠告した。
二人は、仲睦まじい様子で屋敷の中に入って行った。
ハリスは、その場を離れることなく座ったままだった。

二人が成田空港の到着ロビーに出ると、夏休みということもあり人で混雑していた。
トニーがキョロキョロと、人を探す素振りをする。
「お待ちしていました」
トニーに声を掛けて、近づいてくる女性がいた。
彼女は上下黒のスーツ姿で、年齢は三十を過ぎたぐらいに見えた。仕事のために、二人を迎えに来ているようだった。
「久しぶりだね。ミッチェル」
トニーは笑みを見せて、親しそうに彼女の名前を呼んだ。
「また、お会いできて光栄です。こちらがジェニーさん？」
ミッチェルがジェニーの方を見て、ニコリと笑った。
「そうです。ジェニー様、こちらはミッチェル・アノールド。旦那様の姪になられる方です」
「えっ！？」
トニーの紹介で、ジェニーは目を丸めた。ロンドンを発つ前に、日本に着いたら世話をする人間がいることは聞かされていた。それが、エディの身内だと聞かされて意外そうに驚いた。
「叔父様から、いろいろ協力するように言われています」
「頼みます」
トニーは期待を込めて言う。
「それでは行きましょう。外に車があります」
ミッチェルの後を、ジェニーとトニーは、キャリーバッグを転がして外に出た。

ミッチェルが、プリウスを運転しながら高速道路を走らせいた。
「叔父様、元気にしています？」
ミッチェルが助手席のトニーに尋ねた。
「ええ、お元気です」
トニーが答えた。
ジェニーは、後部座席の窓から流れる景色を眺めていた。
「仕事のほうは、どうです？　」
「最近は投資も順調な様子です」
「そうじゃなくて・・・・・・日本に来るということは、始まったの？」
ミッシェルは、ミッションのことを気になっていた。
「レプリカ計画は始まったようです。旦那様はリーダー的な立場です」
トニーは、はっきりと言った。
「そう・・・・・・もう若くないから、無理して任務を遂行することもないのに」
ミッチェルは、本音をこぼす。
「ただ、今度のミッションで終わりにするようです」
トニーが真顔で言う。ジェニーもそのことを聞くと、エディは覚悟を持って、ミッションに携わっているようなものを感じた。

プリウスは都心へと向かっていた。

ミッチェルは、二人をタワーマンションの一室に案内する。
扉横のキーボタンを押すと、ＯＫの文字が表示される。キーを鍵穴に入れると、ガチャンと音がした。
「どうぞ」
ミッチェルはドアノブを持って、先に二人を中へ入れた。

「ワァー！」
ジェニーは目を見開いた。
広いリビングルームに入りなり、ゆったりとしたソファが並べてある。その奥には窓が広く取ってあって、陽がよく射し込んでいた。
ジェニーが窓際に来ると、目の前にはビルが並んであって、東京タワーが見える。
「すごい！」
ジェニーは外の景色を感激した。
「気にいってもらえたようですね。滞在中は、ここで過ごして下さい」
ミッチェルの言葉に、「ありがとうございます」
ジェニーは笑顔で言った。
「早速だけど、経過報告を聞きたい」
トニーは顔色を変えずに、真顔で言った。その表情を見て、トニーは、エージェントとして仕事モードに切り替わっていることを悟った。
ジェニーも気を引きしめて話に加わる。

ジェニーは、トニーと並んでソファに座る。
テーブルを挟んで差し向えにミッチェルが座り、ノートパソコンを開いた。
「彼女は富山亜希子。ジェニーさんのお姉さんになる人物です。横浜在住で、叔父夫婦と一緒に暮らしています」
ノートパソコンの画面には、白いワンピース姿に、黒髪を束ねて写っている女性がいた。
チラリと、トニーがジェニーの顔を見る。ジェニーは、ブロンズ色の髪でショートカットだった。目には、青のカラーコンタクトレンズを入れてある。外国人を装っているが、富山亜希子と瓜二つだと思った。

「今、彼女は何をされているんですか？　」
ジェニーが興味深く尋ねる。
「横浜の大学に通っています」
「彼女と接触したのか？　」
トニーが気になるように尋ねた。
「メールでのやりとりをしています。近いうち会うことも約束しました」
「そうか・・・・・・それじゃ、ジェニー様と彼女が接触できるようにしてくれ」

トニーは、せかすように言った。
「わかりました。いい待ち合わせ場所を用意します」
ミッチェルはテキパキと答えた。
「ジェニー様、彼女に会う覚悟はできていますね？」
トニーが確認するように尋ねた。
「ええ」
ジェニーも真顔で頷いた。

「それから、頼んでおいたものは用意できているかい？　」
トニーは、もうひとつ気にしていることを尋ねた
「それが・・・・・・」
ミッチェルは答えづらそうだった。
「どうした、用意できなかったのか？　」
「ええ、用意できると聞いていましたが、急にダメになったようです」
「どうしてだ？　」
「私にも理由はわかりません」
ミッチェルの言葉に、トニーは困ったような表情をした。

次の日の朝。
ジェニーが目を覚ますと、見知らぬ天井があった。ハッと起き上がると、すぐに日本にいることに気付く。壁に掛けてある時計を見ると、午前９時を過ぎていた。時差ボケがあって疲れていたのか、よく眠ったという実感があった。パジャマ姿でベッドを降りて寝室を出ると、リビングルームだった。

「おはようございます」
ダイニングテーブルの椅子に腰かけて、ノートパソコンを開いているミッチェルが言った。
「おはようございます」
ジェニーも挨拶する。
「すぐに着替えて下さい。外に朝食を食べに出ましょう」
ミッチェルが、ノートパソコンをしまい込みながら言った
「はい」
ジェニーが返事をすると周りを見て、「トニーさんは、どこか行かれたんですか？　」
トニーの姿が見えなかった。
「今、イギリス大使館に行っています」
「大使館！？　」
ジェニーが首を傾げた。

トニーは、イギリス大使館を訪問すると客室に通される。
客室のドアが開いて、「よくいらしゃいました」
恰幅のいい五十を過ぎた男が現れた。男は大使だった。
トニーと大使は、テーブルを挟んで差し向えに座る。

「お泊りのお部屋は、気に入っていただきましたか？　」
「配慮していただき、ありがとうございます」
「ところで、ここまで来るのは何事でしょうか？　用事があれば、ミッチェルに言っていただきたい」
「ミッチェルに拳銃の貸し出しを頼んでおきましたが、そちらからは貸し出し出来ないと聞かされました。どういうことですか？　私は、イギリス国家の極秘ミッションで来ています。もしかすると、危険なことも起こるかもしれない」
トニーは真顔で言った。

「危険なこと・・・・・・それは、アメリカのＣＩＡのことをおっしゃっているんですか？　あなたは、Ｍｉ６では有能なエージェントかもしれないが、ここは日本だ。イギリス本土ではない。アメリカ人と拳銃の撃ち合いをするなんて、許すわけにはいきません」

「撃ち合うわけではない。護身用に用意するだけです。本部からも話がきているはずです」
「確かにＭｉ６の本部からは、拳銃の貸し出しの連絡がきました。私も、我が国の遺伝子細胞の技術は、大きな国益になるのは事実だと思います」
「それならば、協力してもらいたい」
トニーが念を押すように言った。
「ですが、この日本で、イギリス大使館が用意した拳銃を使用して、死人でもでたら、どう説明していいのか。非難を浴びることも容易ではありません。 私は大使として許すわけにはいきません」
大使は、トニーの言い分を頑固として跳ねのけた。結局、拳銃を受け取ることはできなかった。

トニーは、大使の冷たくあしらう態度に、腹ただしい気持ちで大使館内の廊下を歩いた。提示版の前を通りかかると、『フェスティバル』のポスターが目に入った。
（そういうことか・・・）
トニーは納得した様子で、『フェスティバル』のチラシを一枚、上着の内ポケットの中へしまい込んだ。

「大使が拒んだのか？」
「ええ、日本のイギリス大使は、このミッションには協力的ではないようです」
トニーは大使館を出るなり、すぐにエディに電話をする。
「おそろく、レプリカ計画を反対する議員が、大使館に圧力をかけたんだろう」
エディは、思い当たるような言い方をする。
「日本で拳銃を用意できる人物を探してみよう」
「いえ、それにはおよびません。自分で何とかします」
トニーは心に決めた様子だった。
「大丈夫なのか？　アメリカのＣＩＡのエージェントが動き回っているという情報もある。十分気をつけてくれ」
「わかりました。また連絡します」
電話は終えたトニーは、なにやら考え込んだ後、タクシーに乗り込んだ。

店員が牛丼とみそ汁セットを持って来て、テーブル席に置いた。
「ワァ！」
ジェニーは目を輝かせて言った。
「ここで良かったんですか？　」
ミッチェルが気にかけるように言った。
「ええ、以前から食べてみたかったんです」と、ジェニーが答えると箸を手にする。
ミッチェルは、朝食をホテルのレストランでと考えていた。車で移動中、助手席のジェニーが思い立ったように言った。
「そこのお店に行きませんか？　」
ジェニーが、車窓の向こうを指さしたのは牛丼チーエン店だった。
「いただきます」
ジェニーは牛肉を口にする。
「うん・・・・・・美味しい」
ジェニーは感激していた。
「私もいただきます」
ミッチェルは、鮭つきの朝食セットを頼んでいた。
ジェニーは、すぐに牛丼を平らげた。
「ごちそうさまでした」
ジェニーは手を会わせて、満足そうに言ってお茶を飲みながら、「今日は何をするんですか？」
ミッチェルはみそ汁をすすった後、「鎌倉に行きます」
「鎌倉！？　」
ジェニーは、お茶を飲む手が止まった。

「江ノ電ですよ」
ミッチェルは運転しながら、助手席のジェニーに言った。
ジェニーは、助手席の窓から走り抜けてゆく電車を見ていた。
フロントガラスの向こうに、キラリとまぶしく光る海が見える。信号待ちになって、ミッチェルは、顔が半分ほど隠れる丸いサングラスをする。「ジェニーさんも使って下さい」
ミッチェルが、ジェニーにも同じサングラスを渡す。
ジェニーは、サングラスを受け取るも使用せずに、服の内ポケットにしまい込んだ。

道路の案内表示板には，『由比ヶ浜海水浴場』と書いてあった。やがて、車は渋滞してノロノロ運転が続く。７月の週末ということもあり、海水浴場は人で賑わっていた。
ジェニーは、ずっと海を見ていた。自分が住んでいる場所は、ロンドン郊外で、海は離れているところにある。なかなか海で泳ぐ機会がないため、人で溢れる浜辺が妙に珍しくも思えた。

ミッチェルの運転する車は、海水浴場から離れてゆき、山手の方に来た。やがて、静かな住宅街の入り組んだ道を、迷うことなく車を走らせて停まった。
「そろそろ出て来る時間です」
ミッチェルが、立派な門構えをした日本家屋を見て言った。
すると屋敷から、スラリと背の高い白髪の男性が出てきた。
「あの方は？　」
ジェニーが尋ねた。
「あの方を覚えておいて下さい。東帝大学の福岡教授です。レプリカ計画の実験を成功させた人物です」
「・・・・・・」
ミッチェルの言葉に、ジェニーは興味深く、福岡教授の姿を目で追った。

「いらっしゃいませ」
店にスーツ姿の若い男性客が入ってくると、シルビアが声を出した。
男性客は窓際のテーブル席に座った。
シルビアはお冷をテーブルに置いて、「今日は、いつもよりは遅いですね」
壁かけ時計を見ると午後2時近くだった。男性客が、ランチの時間を過ぎてくるのは珍しかった。
店の中は、カウンター席に年配の夫人だけだった。
男性客は、メニュー表を手にして、「客のところへ行っていたら遅くなってしまった。オムライスセット頼むよ」
「かしこまりました。オムライス、ワン」
シルビアが、カウンター奥の厨房に注文を伝える。
「はい」
厨房にいるマスターが返事をする。
「亜希子ちゃん、皿を用意して」
マスターが、厨房の中で皿洗いをする亜希子に言う。
「はい」
すぐに亜希子は棚から皿を出す。

亜希子は、バイトを始めて一週間が過ぎた。
マスターが作る洋食は、美味しいと女性に人気があって繁盛している。オフイス街にある店は、ランチの時間ともなると客でいっぱいになる。マスターとバイト二人だけの店は、先ほどまで忙しかった。
亜希子がバイトを始めた日は、仕事の内容もわからず、客の応対も上手くできず、あたふたするだけだったが、今は大分慣れてきた。

男性客は、携帯電話のメールをチェックした後、シルビアを呼んだ。

「シルビア、この前の話のことだが」
男性客は親しそうな口調で言う。
「どうなりました？」
シルビアも興味深く聞き入る。
「９月だったら、どうだろう？」
「９月！？　ずいぶん先なのね」
シルビアは、少し面食らったような顔をする。
「すまない。メールの返事がきて、みんな忙しいんだ。９月にバスケOB会があるから、その時に男性が集まる。その日はどうだろうか？　」
「そう・・・・・・わかった。それでお願いします」
シルビアも納得する。

「お待たせいたしました」
亜希子が、テーブル席にオムライスとスープを持ってきた。
「ありがとう」と、男性客が言うと亜希子の顔を見る。
「君、会うのは初めてだね？　」
男性客が興味深く尋ねた。
「一週間前から、ここでバイトを始めた富山といいます」
亜希子は笑顔で自己紹介する
「こちらこそ」
「私と亜希子は、同じ大学に通っているのよ」
シルビアが、亜希子の横に立って説明する。
「それじゃ、彼女もくるの？　」
「えっ！？」
亜希子は、男性客の言ったことにキョトンとする。
「まだ話していないわ」
シルビアが答えると、男性客の携帯電話が鳴った。
「ごめん」と、男性客は電話の相手を見ると、すぐに電話に出た。
「はい、わかりました。すぐに伺います」と、男性客は電話を終える。
「その話は、また今度にしよう。またすぐに行かないといけない」
男性客は忙しい様子で言うと、あっという間にオムライスを平らげた。

「ごちそうさま」
男性客は、レジで現金を受け取るマスターに言う。
男性客はおつりを受け取ると、「また、具体的なことが決まれば連絡する」
シルビアに言うと、亜希子にも軽く会釈して店を出た。

「ねえ、あの人は？　」
亜希子は、男性が常連客だと思い、名前を教えてもらおうと思った。
「滋賀健太という銀行員の男だよ」
マスターが答えた。
「何か約束事でもあるの？　」
亜希子は、二人の会話のやりとりが気になった。
「亜希子も出席して！　」
シルビアは笑顔で言う。
「出席って？」
「合コンだよ」
話の内容を知っているマスターが答えた。
「合コン！？」
亜希子は、突拍子もないことを聞いて目を丸めた。

夜。
店の営業時間を終わった。
マスターはカウンターの椅子に座り、売り上げの計算を始めた。
厨房の奥から、亜希子とシルビアが着替えを終えて出て来た。

マスターは電卓を手にして、「お疲れさま」
「お疲れさま」
シルビアは笑みを見せた。
「お疲れさまです」
亜希子は、マスターに礼をする。
「ゆっくり休んでね」
明日は休業日のため、マスターは二人を労うように言った。

二人が店を出ると、ムッとした夏の熱風を感じた。
「ねえ、今から何か食べにいかない？　」
空腹のシルビアが誘った。
「ごめんなさい。今日は早く帰らなきゃいけないの」
亜希子は、すまなそうに断った。
「そう・・・・・・じゃ、また。ねえ、合コンのこと考えておいてね」
別れ際、シルビアは念を押すように言った。
「ええ」
亜希子は小さく頷き、シルビアの後ろ姿を見送ると、肩掛けバッグから携帯電話を取り出した。
亜希子はメールを見て、決心した様子で返信する。

その頃。
ジェニーとミッチェルが鎌倉から、マンションに帰って来るとトニーがいた。
「トニーさん、何をしているんですか？　」
ジェニーが興味深く尋ねた。
トニーはリビングのソファに座り、テーブルの上で小さな部品を置いて作業した後だった。
「それは・・・・・・」
ミッチェルは、すぐに気が付いたようだった。
「モデルガンを改造したよ」
トニーはイギリス大使館を出た後、店でモデルガンを買った。それを改造して、本物のように見せて使うことを思いついた。
トニーは何かを確かめるように、右手に持ったピストルを眺めて、「よし、OK」
「やはり、貸し出し出来なかったんですね」
ミッチェルは申し訳なさそうに言った。

「大丈夫だ、これで何とかなりそうだ」
「モデルガンで、相手と撃ち合うんですか？　」
ジェニーが不思議そうに尋ねた。
「まさか・・・・・・本物じゃ負けますよ。でも、ある程度までは身が守れるはずです」
「本当に守れるんですか？　」
ジェニーは心配そうに尋ねる。
「ハッタリというものがあります」
「ハッタリ・・・・・・！？　」
「トニーさんは拳銃の使い手ですけど、十分気を付けて無茶しないで下さい」
ミッチェルは不安そうに言う。
「使い手・・・・・・！？」
ジェニーが驚いたように、トニーの顔を見た。
「僕のことはいいから、彼女とは会える手配ができたのか？　」
トニーは照れながら、ミッチェルに尋ねた。

「はい、彼女からメールがきました。明日の夜なら、大丈夫だということです」
ミッチェルが携帯を見て答えた。
「よいよミッション開始ですが、大丈夫ですか？」
トニーは、ジェニーの気持ちを確かめるように尋ねた。
「はい」
ジェニーは、気を引き締めるように返事をした。
「どこで会う予定にしている？　」
トニーが場所のことを気にかけた。
「夢の国です」
ミッチェルの言葉に、ジェニーとトニーは顔を見合わせた。

次の日の夜。
亜希子は、東京ディズニーランドの入場ゲート前にいた。
夜になってランド内は、きらびやかに電灯が光って見える。亜希子は花柄のワンピースを着ていた。その姿が自分だという目印だった。

亜希子は入場ゲートを通りぬける。本当に彼女は来るのだろうか。少しの不安もあり気持ちも高ぶった。

目の前の先には、シンデレラ城が見える。
パレードのアナウンスが流れる。いっせいに客が広場の方へ歩き出した。
亜希子も人の流れのまま、キョロキョロしながら歩き出した。
ブ～ンと音が鳴った。亜希子が肩に掛けたポーチから、携帯電話を取り出す。
指定された電話番号だったので、迷うことなく電話に出た。
「はい」
亜希子は周りを見て、「ドリングワゴンの売店の前よ」
目の前には愛想よく、カップ入りのドリンクを売っているスタッフがいる。
「ええ、待っているわ」
亜希子は緊張した様子で、自分のいる場所を言って電話を切った。

亜希子は、記憶のない写真が届いてから一週間が過ぎた。
それ以前から、自分の出生の事に関してのメールは届いていた。初めは気味が悪く、いたずらだと思って無視していた。だが、母親のことを書いたメールが届くと、急に気になり始めた。そこには、亜希子と叔父夫婦しか知らない内容が書いてあったからだ。

母親がロンドン郊外の病院で、亜希子を生んだこと、その時の体重や健康状態、産後の状態も書いてあった。その後もメールは届いた。
母親が、交通事故で亡くなった場所の地名が書いてあった。亜希子が確かめるように叔父に尋ねた時、その場所の地名が出た。その時、このメールには事実が書いてあり、信用できるものと思った。

『妹が、あなたに会いたがっています』と、メールが届いた。待ち合わせ場所を、東京ディズニーランドと指定された。
亜希子は、その妹が、何か出生のことを知っているかもしれない。事実を知りたい気持ちが強く、迷うことなく妹に会うことを決めた。

亜希子が、ドリンクワゴンの横に立った。その位置からだと、大勢の人が、入場ゲートを通りぬけて来るのが見える。若いカップルから、子供を連れた親子などが歩いてくる。その中に、ブロンドの髪に、顔が半分隠れる丸いサングラス姿の女性が目に留まった。亜希子には、彼女が印象深く見えた。
一度、彼女は立ち止まり、亜希子の方を見る。そして、ゆっくり亜希子の前に来た。
亜希子は、会おうと心に決めていたが、いざ本人を目の前にすると、緊張したものがあった。

「あなたが、ミス・キャットさん？　」
亜希子は半信半疑に尋ねた。
「ええ、そうよ」
ジェニーは、サングラスを取った。
その瞬間、亜希子はハッとした。髪の色や目の色は違っていても、顔の輪郭から、背格好と体形まで、自分と瓜二つだと思った。やはり、彼女は自分の妹なんだろう。そう思いながらも、客観的な観察を始めていた。

「そこに座らない？　」
ジェニーは、目の前のベンチを見た。
「ええ」
亜希子が頷いてベンチに座る。
ジェニーも、亜希子と少し離れて横に座る。

亜希子は、ジェニーを見つめたままだった。
ジェニーが気に掛けるように、「どうしたの？」
「私に妹がいると聞いてから、本当は、どうなんだろうと思っていたけど、今、目の前にしてみると何だか変な気がしていて」
亜希子は本心を言った。

「・・・・・・」
「・・・・・・」
少しの時間、二人には、よそよそしいものがあった。その空気を押し流すように、「今まで、どこで何をしていたの？」
亜希子は、思い切るように尋ねた。

「くわしいことは言えないけど、イギリスにいて学生をしているわ。でも、特別な仕事もしている」
「特別な仕事？　」

亜希子が目を丸めた。
「そのことは、聞かないほうがいいわ」
ジェニーは、真顔で拒むように言う。
そのことに、亜希子は秘密めいたものを強く感じた。
「そうなの・・・・・・それじゃ、話せることだけでもいいから教えて？　」
ジェニーは何を聞きたいのと、言わんばかりに亜希子を見る。
「たとえば、好きな食べ物とか、どんな動物が好きだとか？」
「好きな食べ物はお寿司。動物は猫を飼っているわ」
ジェニーは、表情を変えずに淡々と答えた。
その態度が面白く思えて、亜希子はフッと笑いが出た。
「笑ってごめんなさい。何だか変だったから・・・・・・」
再び亜希子は、右手で口元を隠しながら笑う。
「・・・・・・」
ジェニーは、何と言っていいかわからない。
亜希子の中に緊張感が薄れていた。
「ねぇ、せっかくだから、何か乗り物に乗りながら話さない？　」
亜希子は、アトラクションの方に目をやる。
「悪いけど、そんなに長くはいられないの」
「そう・・・・・・」
亜希子は残念そうな顔をする。
その表情を見て、「ごめんなさい」と、ジェニーはすまなそうに言った。
「いいのよ。気にしないで」
亜希子がニコリとする。

「ねえ、母のことは何か知っているの？　」
亜希子は、一番に知りたいことを尋ねた。
「・・・・・・」
一瞬、ジェニーは少し考えた。そして、「あなたが母親のお腹の中にいた時から、私は試験官の中で育っていた」
「試験官！？　」
亜希子が興味深く尋ね返した。
「私は、あなたのクローン人間なの」
「・・・・・・えっ！？」
亜希子は、一瞬耳を疑った。

「私は、あなたが生まれたと同時に、ある研究室で生まれたの。お母さんにあたる、富山幸子の遺伝子細胞を使って」
「遺伝子細胞！？」
「ええ、レプリカ計画よ」
ジェニーは、その言葉を強調していた。
「レプリカ計画って、何？　」
亜希子は、何のことを聞かされているのか、さっぱりわからなかった。「くわしいことは言えないけど、国家機密になっていることなの」
ジェニーは静かに答えた。
亜希子は、その言葉のニュアンスから、彼女は複雑な事情を持っているように思えた。

「簡単に言えば、私は、あなたのコピーで生まれたの。日本の大学教授の研究チームで行われたと聞いているわ。それ以上のことは、私にもわからないの」
「・・・・・・」
ジェニーの言葉は、亜希子にとってはショッキングだった。

「私は大丈夫。そのことは受け入れて、今まで生きてきたわ」
ジェニーは、偽りのない気持ちで堂々と言った。
「なぜ、私に会いたいと思ったの？　」
亜希子は、ジェニーの本心を聞いた。
「私は知りたいの。自分の出生のことや、父親は誰なのか。そして、どうして母は亡くなったのか。あなたも事実を知りたいと思わない？　」
ジェニーは、まじまじと尋ねた。
「ええ、それは、もちろんよ」
亜希子も小さく頷く。

「私の仕事を手伝ってほしいの？」
「仕事・・・・・・どんなこと？　」
亜希子は興味深く尋ねた。
「まだ、今は具体的なことは言えないけど・・・・・」
「・・・・・・」
亜希子は迷っていた。目の前の彼女は、確信的なものはないが、身内には間違いないような気がする。だが、国家機密とか研究チームとか、自分の世界とは、かけ離れた話が、どこか信じがたいものもある。
「少し考えさせてくれない？　」
亜希子は迷いながら答えた。
「もちろんよ」

ジェニーも無理を言うことはしなかった。

急に音楽が流れて、客の歓声が聞こえてきた。
パレードが始まった。
「ねえ、近くへ行ってみましょう」
急に亜希子が立ち上がり、ジェニーの手を取った。
ジェニーは、亜希子に引っ張られるようにして、観客の中へ入る。
目の前に、軽快な音楽に合わせて、ディズニーのキャラクターが登場する。そのたびに歓声が聞こえる。
ミッキーマウスとミニマウスが、きらびやかな車に乗って、観客に手を振っている。
亜希子が笑顔で、キャラクターに手を振る。その横でジェニーは、亜希子の顔を見つめていた。

パレードが終わると花火が上がった。
華やかに花火が、夜空に散ってゆく。
「きれいね」
亜希子が見上げながら言うと、何も言葉が返ってこなかった。
ふっと、亜希子が周りを見渡すと、ジェニーの姿はなかった。
すると、ブ～ンと急に鳴った。
慌てて肩掛けポーチから、携帯電話を取り出すとメールが入っていた。

『親愛なる姉へ。会ってくれてありがとう。また連絡する』と、書いてあった。
『待っている』と、亜希子は返信する。

ジェニーとトニーは、浦安市近郊のラーメン店にいた。
ディズニーランドには、ミッチェルの車で出向いた。その後、ミッチェルは用事があるため都内に戻り、それを終えて合流することになっていた。

二人は待つ間、食事をすることにした。駅前周辺を歩いていると、ラーメン店が目に入った。
日本のラーメンは美味しいと聞かされていたため、二人は迷うことなく店に入った。
二人は、差し向えでテーブル席に座る。
トニーがメニュー表を持って、「何になさいますか？　」
ジェニーは浮かない表情だった。
「ここは醤油ラーメンが美味しかったんですね・・・・・・」
トニーは、ジェニーが食べたいものはわかっていた。店員に声を掛けて注文する。
「どうかされましたか？　」
トニーが気に掛けた。
「彼女を、ミッションに誘うべきではなかったんでは・・・・・・」

ジェニーは、亜希子の無邪気な表情を見て、スパイ活動の手助けは似合わないと思えてきた。そして、今となって、亜希子に対しては、エージェントとして事務的な対応ではなく、もっと打ち解けるような会話をするべきだったと後悔があった。

「迷いがあって、福岡夏彦のことは言えなかったんですね？」
トニーは、ディズニーランドの中で、二人のやりとりを一部始終見ていた。
「そうですか・・・・・・でも、僕は、彼女自身も覚悟を決めて、ジェニー様に会いに来ていたようだと思いました」
トニーは感じたままを言った。
「あせらずに少しずつでも、姉妹の距離を近づけて、信頼関係を築いてゆけばいいと思います」
トニーは優しい口調で言う。

「トニーさんに、ひとつ聞いていいでしょうか？　」
ジェニーは不思議そうに尋ねた。
「何でしょうか？　」
「トニーさんは、有能なエージェントと聞いています。仕事をするうえで、不安や恐れ、罪悪感があったりすることはありませんか？」

トニーは少し考えて、「僕自身、エージェントとして、誰かのためになることだと思って、仕事をしています」
トニーは、きっぱりと言った。
「確かにエージェントは、自分の意思とは違う任務を遂行することもあります。時に心を痛める

こともあります。そんな時は、特に誰かのためになっていると、強く思うことにしているんです」

「誰かのため？」
「レプリカ計画は、遺伝子細胞の研究です。大きな国益を生む技術でもあります。それを欲のために、群がる人間がいるのも事実です。それでも、医学的に、かなりの進歩が期待できることも聞いています。その技術が、病で苦しんでいる多くの人を救えるならば、僕は、そのことを願って信じて仕事をしています」
トニーは、エージェントとしての強い意思を持っているようだった。
ジェニーは、トニーの言葉を聞き入っていた。

「はい、お待たせしました」
店員が、二人の前に醤油ラーメンのどんぶりを置く。
「僕のことはいいから・・・・・・」
トニーは、ジェニーの眼差しを感じて照れながら、「いただきましょう」
トニーが箸を手にしながら言う。
「はい」
ジェニーがひと口麺を口にして、「おいしい」

ジェニーは、トニーの言ったことに、どこか救われた気持ちになった。
二人は、ラーメンをすすった。

二人はラーメン店を出て、ミッチェルの車が駐車している場所まで歩くことにした。しばらく歩くと、トニーが背後に何かを感じたのか、急に厳しい表情になった。
「振り返らず歩いて下さい」
トニーは、ジェニーの顔を見ずに正面を向いたまま言った。何か異変があることを察したジェニーは、言われるまま歩いた。
二人は、シャッターが閉まったアーケード街の中を歩く。
「そこに入ったら、すぐに身をひそめて下さい」
トニーに言われるまま、ジェニーは建物の間にある暗い路地に入ると、素早く建物の壁にしゃがみ込んだ。すると、背の高いスーツ姿の男が路地に入って来た。

男は、二人の姿を見失って立ち止まった。
「このままいて下さい」
トニーに言われるまま、ジェニーは身をひそめた。
「何でつけている？　」
トニーが壁から出て、男の背中に声を掛けた。
男は振り返りながら、「久しぶりだな。コードネーム、ブラック・タイガー」
「おまえは・・・・・・スネークマン」
トニーは驚いたように言った後、顔色が変わり右手を内ポケットの中に入れた。
「覚えてくれていたのは光栄だ」
男はにや笑いする。

「まさか、おまえがエージェントとして復帰するとは・・・・・・」
「今すぐ消えろ。それとも昔の続きで、ここでやり合うつもりか？　　おまえのナイフが先か、俺の銃弾が先か、試してみるか？　」
トニーは、するどい目つきで男を睨みつけながら、銃を取り出した。
「勘弁してくれ。ここでやり合うつもりはない」
「それだったら、早く消えろ」
「わかったよ。おたがい国家のために、いい仕事をしょう」

男が立ち去ろうとした時、壁ぎわにひそんでいた、ジェニーの方に目をやる。
「お嬢さんもエージェントかな。また、会うこともあるかもしれないね。その時
まで・・・・・・」
男は、ジェニーを見て薄笑いして、ゆっくりとアーケード街に消えてゆく。

「あの人は？　」
ジェニーが、トニーに近寄る

「通称、スネークマンという、アメリカ政府から雇われている男です。ナイフの使い手で、時には殺しもする人物です。CIA捜査官の用心棒をやっていると噂で聞いています。おそらく、我々を見張るように言われていたんでしょう」
トニーは、玩具店で買った銃を内ポケットにしまいこんだ。
「トニーさん、それは・・・・・・」
ジェニーは、銃がモデルガンだということに気付いた。
「ハッタリですよ。なんとかなりました」
トニーは照れたように言って、「早く行きましょう」
二人は急ぐように、ミッチェルが待つ場所に向かった。

二人がマンションに帰ると、ジェニーは、リビングでスネークマンとのことを、ミッチェルに話した。
「まぁ！」
ミッチェルは青ざめた表情する。
「相手が本気でナイフを出してきたら、どうするつもりだったんですか？　」
ミッチェルは心配顔で、トニーに言い寄る。
「なんとかなるさ」
トニーが平然と言う。
「そんな曖昧なこと言わないで下さい！」
ミッチェルは、怒ったような言い方をする。
ジェニーは、ミッチェルの怒りが異常にも思えた。
「もう、誰も亡くなってほしくないんです」
ミッチェルは目に涙をためていた。
「仕事とはいえ、命は大事にして下さい」
ミッチェルは意味ありげに言って、リビングを出て行った。

その後。
「ええ、わかりました。それでは」
トニーが携帯電話で話を終える。
「叔父様に電話だったんですか？　」
ミッチェルはシャワーを浴びた後で、白いガウン姿でリビングに入ってきた。
「今日のことを報告した」
「ロック飲まれますか？　」
ミッチェルがテーブルに置いてある、スコッチウイスキーのボトルを見る。
「いただくよ。ジェニー様は？」
ミッチェルはグラスに氷を入れながら、「奥の部屋で休んでいます」
「そうか・・・・・・」
トニーはグラスを受け取る。
「余計な心配かけて悪かった」
トニーは反省していた。
「こっちこそ、取り乱してしまって・・・・・・」
ミッチェルは下を向いた。
「キャンデイのことを思い出したんだね・・・・・・辛い気持ちはわかるよ。でも、エージェントは」
「わかっています。でも、私は知り合いを亡くしたくないんです」
ミッチェルは、トニーの言葉を被せるように言った。それは強い気持ちを表していた。
「・・・・・・」

トニーは、ミッチェルの気持ちがわかっていた。大事な人を亡くした痛い気持ちを癒してやりたいと思うが、上手く言葉が出てこない。ただ、彼女を見つめるだけだった。
ミッチェルも、トニーを見つめた。今、二人の間には、何か甘いムードの雰囲気が流れていた。

一瞬、トニーは、彼女を抱きしめたいという思いが芽生えたが、すぐに我に戻って、
「君に頼みたいことがある」
トニーは甘いムードをかき消すように、ミッチェルに顔をそむけて言った。
「えっ！？　」
ミッチェルも、甘いムードに酔いしれた雰囲気から、ハッとして我に戻った。
「イギリス大使館に掛け合ってくれないか？　」
トニーは一枚のチラシを見せた。チラシは、イギリス大使館が主催する交流会だった。
「ジェニー様にも、在日のイギリス人と知り合いになってもらいたいと思うんだ」
トニーは、ミッチェルの顔は見ずに言った。
「わかりました。この交流会の主催者は知り合いです。出席できるように頼んでみます」
「そうか。じゃ頼んだ」
「わかりました」
ミッシェルは、トニーの顔を見ずにリビングを出た。

トニーはソファにもたれた。一瞬だけ、ミッチェルを特別な女として意識した。だが、その心を自ら跳ね返した。その理由はわかっていた。
彼女は、自分が仕えている主人の姪である。恐れ多くも触れることなどできない。これで良かったと、自分に言い聞かせながら、一気にウイスキーを飲みほした。

長野正平が上司と一緒に、ホテルの廊下を歩きながら、部屋の前で足を止める。
「こちらですね」
部屋はビップルームだった。扉の前に、体格のいい大柄な男が立っている。男は部屋に入る人物に敬礼をする。
「何かありましたら、呼んで下さい」と言って、長野は部屋から廊下に出た。
部屋は、パーティーに出席する来賓者の控室になっていた。

「おまえも手伝いなのか？」
長野は大柄の男に声を掛けた。男は山形達郎だった。長野と山形は、警察庁に勤務する同期で、年齢も同じ２５歳だった。
「上司から人手が足りないという理由で、警備隊員にされたわけだ。おまえは何のために？」
「今日は部長の送り迎えの運転手だ」
組織の中、二人の若い警察官は、いろいろと使われることがある。

「今、部屋の中に徳島議員がいた」
「ああ、そうだ。今人気者の若手代議士、徳島議員の警固だ」

一週間前、徳島議員のところに殺人予告の手紙が届いた。
徳島議員が、推進して国会の法案を通そうとすることに、反対している人物からのようだった。
このような手紙は、いたずらというのが多いのだが、用心をして警察に届けをした。

徳島は二世議員で、父親は外務大臣も務めたこともある、大物政治家だった。年齢は四十を過ぎたばかりで、今若い世代から支持があり、政治の世界に新しい旋風を巻き起こしている。毎日、テレビで動向が報道されている。そんな徳島に何かあったらと、警視庁が動いた。だが、ベテランの警察官は、ほうぼう警固に出ているため人がいない。そんな時、警察庁の山形に応援の声が掛かった。

実際、徳島議員は朝から夜まで、いろんな場所へ行き、慌ただしく演説や視察などする。警察官は、その間気を張り詰めて任務にあたる。警固も三日目、山形はクタクタだった。

「自分は、今からパーティーが終わるまでは待ち時間だ。それじゃ」と、長野は足早に廊下を歩いて行く。
「いいよな・・・・・・生活安全課は」
山形は、長野の後ろ姿を見て、ボソリと愚痴を言った。

「ドレスを着てくれば、良かったんでは？」
タキシード姿のトニーが、後悔したように尋ねた。
「私は、これがいいんです」
ジェニーは、自分が着ている紺のスーツを気に入ったように言う。
「ちょっと失礼します」
トニーは、知り合いを見つけた様子で挨拶に向かう。

二人は、イギリス大使館が主催する交流会パーティーに出席した。
パーティー会場は、都内の有名ホテルだった。
会場は凄い人だかりだった。会場内は、日本に滞在中のイギリス人国籍がある人間が出席している。

トニーが戻って来た。
「これは、どうも」
二人の前にイギリス大使が現れた。
「どうも」
トニーは無表情だった。
「こちらが、エディの所にいるお嬢さんですか？」
大使がジェニーの顔を見る。
「ジェニー・アーノルドといいます」
ジェニーは、笑みを見せて自己紹介する。
「ところで、いつ、イギリスにお帰りになられるんでしょうか？　」
大使は、ジェニーのことを無視して、トニーに尋ねた。
「安心して下さい。明日には日本を発ちます」
トニーは、大使の顔は見ずに答えた。
「そうですか。それでは、今日は十分楽しんで帰って下さい」
大使は厭味まじりに言って、その場を立ち去った。
「嫌な感じ」
大使の態度を見て、ジェニーがボソリと言う。
「大使館は、私達二人を厄介者と思っています。まぁ、そのことは気にせずに、豪勢な料理もあるようですから、パーティーを楽しみましょう」
「はい」
トニーの言葉にジェニーも共感した。

壇上で式典が始まった。進行役が来賓の紹介をする。
来賓者は、日本の著名人も出席していた。大手企業の社長、有名大学の教授、日本の人気俳優もいたが、中でも徳島議員の紹介をすると、会場内は歓声が沸いた。

ジェニーは、人気者の政治家だと思った。

懇親会が始まり、パーティー会場は賑やかだった。
ジェニーは、フードテーブルに並べた豪華な料理を見て、あれこれ皿に料理を盛り付ける。
トニーが近寄る。
「トニーさんは、召し上がらないんですか？」
「僕は結構です。知り合いがいるので挨拶してきます」
トニーは、来賓席のテーブルへ行く。
席にいる婦人が笑みを見せた。トニーも笑顔を返す。

ジェニーが、皿をテーブルを置いて席に着く。
明日は日本を発つ。ミッションも終わったことだし、今夜は満足するまで食べようと心に決めた。
自分のグラスが空だったため、何か飲み物が欲しいと思った。
目も前にボーイが通りかかった。ジェニーは、何か飲み物を頼もうと声を掛けた。だが、無視するように通りすぎてゆく。
ジェニーは、ハッとしたものを感じた。そのボーイには何か違和感があった。
ジェニーは、何か良からぬ予感がした。そのため席を立ちあがり、そのボーイの後を追いながら、内ポケットからサングラスを手にした。
ボーイは、目的の場所があるかのように、人の間を払いのけるように歩いてゆく。来賓席の前を通りすぎた時、トニーはジェニーの姿が目に入った。

ボーイは徳島の前に立った。徳島はイギリス人女性と会話をしている。
「徳島！」
ボーイは声を荒げて、内ポケットからナイフを取り出した。
「キャッ！」
イギリス人女性は悲鳴を上げると同時に、周りの人間は驚いたように後ずさる。
ボーイが前に出ようとした。すると、徳島の右横から誰かがぶっかってきた。その瞬間、徳島は床に倒れ込んだ。
一瞬、ボーイは何が起こったのかと、ナイフを持ったまま立ち尽くす。そこに、三人の警官が急いで取り押さえた。ボーイは、床に倒されながらも暴れる。

徳島は立ち上がった。
「お怪我はありませんか？　」
慌てて山形が徳島に近寄る。
「ああ、大丈夫だ」と、徳島は周りを見渡す。
「行きましょう」
山形が安全な場所に移動することを勧めた。
「ちょっと待ってくれ。さっき私を助けてくれた女性は、どこへ行ったんだ？　礼を言いたい」

「女性？　」
「ああ、そうだ。私にぶっかってきて、ナイフから身をよけさせてくれた。確かサングラスをしていた」
そこに女性の姿はなかった。
「後で探してみます。とにかく行きましょう」
山形は、徳島を警固しながら会場を出た。

成田国際空港のロビーで、ジェニーとトニーは椅子に腰かけていた。
「昨夜は、料理を召し上がれなくて残念でしたね」
トニーが、昨夜の徳島議員襲撃事件のことを口にした。
「ええ、ひと口も食べれなかったです」
ジェニーは、ごちそうを口にできなかったことに悔いがあった。

「どうして、彼が徳島議員を狙っていたとわかったんですか？」
トニーは、一番に気になることを尋ねた。
「着ている服のサイズが、やけに大きく思えたんです。会場内には、どのボーイさんも、細身でスーマトの男性ばっかりでした。でも、その人だけは、背が低く太った体形で、サービス係とは縁遠い雰囲気があったから、何か気になったんです」
「するどい観察力ですね」
「あの時、すばやくトニーさんが来てくれて、あすこから連れ出してくれたから、私の姿はわからなかった」
「その場にいたら、警察から聴取を受けたりもします。そうなると身元がわかってしまって、面倒なことになるため、そうしました。しかし、サングラスをして顔を隠すのもいい考えです」
トニーが感心した。
「何事もなく良かったです。私の前で、誰かが傷ついたり、亡くなったりするのは見たくなかったから・・・・・・」
「・・・・・・」
トニーは、ジェニーの言葉に、何か深い意味を感じた。

「私、神父さまから教えられていたんです。どんなことがあっても、無駄な血を流すことは許せないと・・・・・・私も同感です。訓練で格闘技や射撃をするのは、あくまでも自分の身を守るためだけです」
ジェニーは心の内を言った。
「そうですか」
トニーは、ジェニーの言葉に何かを感じとった。

「やはり間違いないようです」
見送りに来ていたミッチェルが、二人の元に戻ってきた。
トニーが二枚のチェットを受け取り、「一体どういうことなんだ？　」
「叔父様が席を用意してくれたのかしらん」
ミッチェルも不思議そうに言った。

トニーが、搭乗手続きで航空会社のカウンターに行くと、ファスートクラスの席が予約されていた。エコノミー席を予約だったため、何かの間違いだと思い、ミッチルルにカウンターで確認をしてもらっていた。
「旦那様だったら、事前に連絡してくるはずだ」
トニーが考え込んでいると、内ポケットの携帯電話が鳴った。知らない番号だった。
トニーは、警戒しながら電話に出た。
「トニーかね？　」
「誰ですか？　」
「私だよ。大使だ」
トニーは、急にイギリス大使から電話があって何事かと思った。

「空港にいる頃だと思ってね。君達にファスートクラスを用意した」
大使は、今までとは違って優しい口調だった。
「また、何故？　私達は厄介者のはずでは・・・・・・」
トニーは不機嫌そうに言う。
「君や連れのお嬢さん・・・・・・いや、ジェニーだったね。君達二人には、大変失礼なことをして悪かった」
大使は、汗をかきながら反省したように言う。
「昨夜の件だが、君達二人がいなかったら、徳島議員はどうなっていたか。もしも、何事かが起きていたら、イギリス大使館としては、大変な事態になっていた」
大使は強い口調で言う。
「それで、感謝の気持ちということで、私から、いい席を用意させてもらった」
トニーはジェニーの方を見て、「わかりました。大使の気持ち、ありがたくいただきます」
大使なりの面子があるのだろう。そう思って素直に受け取ることにした。
「それでは・・・・・・」
トニーが電話を切ろうとした時、「それから」
大使が慌てるように言う。
「何でしょう？　」
「君もエディのところにいると、いろいろ苦労があるんじゃないか？　良かったら、私のところで働いてみる気はないか？　」
トニーは、何故そんなことを尋ねるのか不思議に思うも、「結構です。私はエディ様にお仕え

して、不十分だと思っていません」
トニーはきっぱり言い切った。
「そうか・・・・・・」
大使は苦い顔をする。

「では、失礼します」
トニーは電話を切って、「航空チケットは大使からのプレゼントです」
「・・・・・・！？　」
ジェニーがキョトンとする。
「良かったですね。機内食は豪華なものですよ」
ミッチェルが言うと、「ヤッタ！」
ジェニーは満面の笑みで喜んだ。

手荷物検査場の入り口前まで、ミッチェルが二人を見送りに来た。
「ありがとうございました」
ジェニーが、ミッチェルに笑顔で礼を言う。
「お元気で」
ミッチェルも笑みを見せた。
「いろいろ世話になった」
トニーが凛々しい顔で言う。
「お元気で、自分を大切にして下さい」
ミッチェルは、願いをこめて言っているようだった。
「・・・・・・」
トニーは黙まった。ミッチエルがトニーを見つめている。
その時、ジェニーは言葉を交わさない二人の間には、男女の別れを感じさるような雰囲気を感じさせた。
「私、先に行きますね」
ジェニーが気を使い、検査場へ行こうとする。
「一緒に行きましょう」
トニーが引き止めた。
「それじゃ」と、トニーはミッチエルに別れを言って、ジェニーと歩き出した。
入り口前、トニーが振り返った。
ミッチエルは立っていた。二人の姿を見て頭を下げた。その姿は、いっものしっかり者の彼女に見えた。
トニーは、ジェニーと一緒に検査場に入って行く。

帰国後。
ジェニーは帰宅すると、すぐに部屋のベッドに疲れた様子で眠り込んだ。昼間になっても起きてこない。
「ニャー」
猫のハリスが、ベッド下に座りこんで鳴いている。だが、一向に起きる様子ではなかった。

トニーは、朝から執事の仕事を始めた。
「どうぞ」
トニーは、エディの書斎に紅茶を持って来て、机の上にカップを置いた。
エディは椅子に腰掛けて、「ありがとう」
紅茶をひと口すする。

「キッチンのほうは、かたづけておきました」
「すまなかった」
トニーが屋敷に帰ってみると、キッチンの流し台には皿が山澄になっていた。ダーインニグテーブルには、食べた後のカップ麺がそのまま置かれていた。
想像は出来た。サラがトニーの世話を辞めたのだ。二人が男女の関係になっても、エディには譲れないものがある。掃除の仕方、料理の味つけ、紅茶を飲む時間、ウイスキーの量など、事細かいことをサラに言いつけた。案の定、『私は執事ではない！』と、怒って屋敷を出て行った。それから三日間は、ひとりでの生活だった。

「トニー、君が入れる紅茶は最高だ」
不十分を経験したエディが、しみじみと言う。
「私から申し上げることではありませんが、サラ様には謝ったほうがいいかと思います」
「そうだな・・・・・・女性の気持ちは難しい」
エディは、反省した様子で苦笑いする。

「ところで、富山亜希子は、ミッションに協力してもらえそうかな？」
エディは真顔で仕事の成果を尋ねた。
「正直なところ、今のところは何とも・・・・・・ジェニー様と彼女は、いい関係を築けるとは思いますが、少し時間を要するかと」
「そうか・・・・・・」
エディは難しい顔をする。
「それで、もうひとつのプランを考えています」
「プランBだな？」
エディは、トニーの言ったことに、すぐに反応して尋ねた。
「ええ」

「わかった。そっちのプランを進めてくれ」
「かしこまりました」

「それから、大使館のパーティーに出席したそうだな。徳島議員がいたようだが？」
エディが気になったように尋ねた。
「ええ、旦那様の思惑どおりにいたしました」
トニーは意味深く言うと、「・・・・・・」
エディは黙りこんで、トニーを見た。

「大使館で拳銃の貸し出しを拒まれた時、私自身、どうもしっくりこないところがありました。しかし、日本を発つ前に、大使から電話を受けた時にわかりました」

「何がわかったんだ？　」
「旦那様は、私をイギリス大使館に出向かせるために、何かしら大使に圧力をかけて、拳銃の貸し出しを拒むようにさせた。それは、そこで徳島議員が出席するパーティーのことを、私に知らせるために・・・・・・」
エディは含み笑いをして、「さすがだな」
トニーの言ったことは図星だった。
「私は執事です。旦那様が何を考えているのか、常に考えております。しかし、かなり大使には無理を言ったようですね。冷たい仕打ちを受けました」
「すまなかった。君だったら、わかってくれると信じていた。ジェニーを徳島議員に引き合わせるということを・・・・・・そして、ジェニーは父親に気付くのか、そこが知りたかった。だが、とんだ邪魔が入ったようだな」
「ええ、一瞬しか会うことが出来ませんでした。おそらく、ジェニー様は、徳島議員の存在は気付いていないようです。ですが、別のことがわかりました」
「何だ？　」
エディは興味深く尋ねた。

「ジェニー様には、殺しのライセンスは必要ないかと思います」
エディは眉をよせて、「それは、どういうことだ？　」
「ジェニー様には信念があります」
「信念？」
「人をむやみに傷つけてはいけないことを、生まれもって教わったようです」
「誰から教わったんだ？」」
エディが前のめりになる。
「コードネーム、ホワイト・ホークスからの教えでしょう」
「ハリス・コークのことを言っているのか？　」
「ええ、そうです。ジェニー様の育ての親です」
「私は、彼女をこの5年間、エージェントとして訓練してきた。それが無駄だとでもいうのか？」
エディは反論する。
「今のジェニー様には、任務のため人を殺めるということは、出来ないと思います」
トニーは、はっきりと言った。
「・・・・・・そうか」
トニーの言葉には、どこか説得力があったのか、エディは反論するのを止めた。

「失礼いたしました」
トニーは、口ごたえしたことを詫びるように言った後、礼をして書斎を出ようとした。
「ジェニーは、君の目から見て、エージェントの資格があると思うかね？　」
エディが、トニーを引き止めるように尋ねた。
トニーが扉の前に立つ。
「私から見て、ジェニー様は、有能なエージェントになる素質は、あると思います」
トニーは本心を言って、再び礼をして書斎を出た。
しばらく、エディは複雑な表情で、椅子に座り込んで考え込んでいた。

昼の警察庁内。
長野正平がトイレに入ると、先に便器の前で用を足す、山形達郎がいた。
「よお」
長野が声を掛けて、山形がいる横の便器に立つ。
「おう」
山形は前を向いたまま返事をする。
「徳島代議士の警固をしているだって？」
長野が用を足しながら尋ねた。
「ああ、襲撃事件以来、俺に警固してほしいと希望があってな」
「すごいじゃないか。認められたんだな」
長野は感心する。
「俺は、徳島議員を会場から連れ出しただけだ。むしろ、お手柄は、謎の女性だ」
「謎の女性？」
「素早い身のこなしで、徳島議員の横から飛び出してきた。それがなければ、犯人のナイフが、徳島議員の心臓に刺さっていたかもしれない。だが、犯人を取り押さえた時には、その女性の姿はなかった」
山形は、女性のことを印象深く不思議そうに言った。

「いずれにせよ。徳島議員に何事もなかったんだろう。良かったな」
「まぁな・・・・・・おかげで、こっちは朝から夜中まで、警固の仕事でクタクタだ。政治家というのは、あっちこっちと、いろんな場所に行って人に会う仕事だからな」
山形は疲れたように言って、用を終えて便器から離れて洗面台へ行く。

「ところで、今度、女子大生と合同コンパをするんだが、おまえも来ないか？　」
「コンパ！」
山形が、一瞬目を輝かせて足を止める。
「横浜女子大学の学生だ」と言って、長野も用を終えて便器から離れた。
「今度の土曜日の夕方だ。男のメンバーは、高校時代のバスケットボール部の人間が中心だが、そのことは気にしなくてもいいから、来ないか？」
二人が洗面台の前に立つ。
「無理だな。その日は警固の仕事が入っている」
手を洗いながら、山形がきっぱりと言った。
「そうか・・・・・・だが、もし時間があるんだったら来いよ。たまには、女性と会話して楽しむのもいいぞ」
長野が手を洗い終わると、店の名前が書いてある名刺を差し出す。
「生活安全課はいいよな。暇があって・・・・・・」
山形は名刺を受け取ると、嫌味まじりに言った。

「それじゃ」
先に長野がトイレを出て行く。
山形は、名刺をゴミ箱に捨てようかと迷うも、思い止まりズボンのポケットにしまいこんだ。

２００８年９月。
ロンドン、午前９時。
朝のランニングを終えたジェニーは、リビングの椅子に座り、タオルで顔の汗を拭きとりながら、腕時計を見る。
「もうすぐですね」
トニーが気になるように言った。
「ええ、大丈夫かしらん」
ジェニーは心配そうだった。
「彼女には、ミッションだということを知らせておくべきでは、なかったんでしょうか？　」
「ダメよ。彼女はプロではないから、男の人を騙すようなことは出来ないわ。ごく自然な形で出会って、親しくなれたらいいんだけど・・・」
ジェニーは思いのままを言うも、心配は収まらない。
「エージェントもついています。かならず上手くゆきますよ」
トニーは、ジェニーの気持ちを落ち着かせるように優しく言った。

その頃。日本時間、午後６時。
「それで？」
ミッチェルは、自宅のデーブルの椅子に座っていた。右手でパソコンのキーを叩きながら、左手には携帯電話を持っていた。
「彼はいるの？　そう・・・・・・しっかりやってちょうだい。ここでうまくゆくかで、今後の計画が大きく進むのよ。じゃ、また連絡ちょうだい」
「わかりました」
ミッチェルと電話を終えたシルビアが、レストランのテーブル席に戻ってきた。
「どうしたの？　幹事がいないから、皆待っていたわよ」
亜希子は、長く席を外したシルビアに、何事かあったのかと気に掛けた。
「ごめんなさい」
シルビアは、友人の女性達と対面席の男性達に詫びる。
今日は、シルビアが主催したコンパの日だった。
女性は亜希子以外、同じ女子大生が出席していた。
男性は滋賀の友人で長野正平がいた。その横の席には、何故か山形達郎もいる。
亜希子の座った対面席には、スラリと背の高い短髪の男性が座っていた。
コンパが始まった。
「初めまして、福岡夏彦といいます。今日は楽しく飲みましょう」
亜希子の対面席の男性は、笑顔で自己紹介した。
亜希子は、何か特別なものを感じたのか、ドキッとした。

完